



2006年2月15日 発行

2006年冬号

<第7号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 union@h9.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/

## 「匠」の歩み

僕は「匠」(たくみ)にくるまえは、サンキス化学工業という会社にいました。ガラスを加工する会社でした。ぼくは26年つとめました。

会社では時間に大へんきびしくいわれました。ガラスをパレットから出してタオルでふいたりしていました。まい日おなじことのくりかえしてしました。まい日もくもくとしていました。しんどくても、よわねをはずががんばっていました。2001年に、もうまくはくりになり、よく年かいこされた時は大へんショックでくやしかったです。なんの26年だったのかという思いでした。

そして山川さんのほうがいいで「匠」にはいりました。はいつた時は、自分はなぜここにいるのかとまどいもありました。でも、仕事のないようがわかってきて、だんだんたのしくなりました。

でも、ユニオンのまわりの人たちが沢山就職したのを見て、ぼくも就職したいという気持ちになりました。ぼくにチャンスがあれば、会社に就職したいです。(松本 弘明)

### グループホーム<アスク>は今

## 地域で暮らす その二

グループホーム「ユニオンII、V」(通称アスク)は、二〇〇四年三月一日に、前号で紹介したメゾンと同じ大正区三軒家の「アスク大正」という五階建てのマンションの中に開設されました。

利用者は、男性六名(平均年齢四十歳)、女性二名(平均年齢二十七歳)。全員が障害年金を持ちます。専従の女性の世話人を置き、生活担当職員一名と嘱託職員二名が交代で宿直業務を担っています。

アスクでの暮らしは、メゾンとは少し異なります。それは、「支援者のいない時間」があることです。一〇分歩いてメゾンに行けば、二四時間三六五日、職員がそこに居ます。しかし、土曜日の夜から日曜日の午後にかけて、アスクは一般のマンション住人と彼らだけになります。

アスクに、夜の見回りはありません。朝ご飯もそれぞれの自宅で食べます。彼らには、「出来る限り自分ですること」が求められています。大変なこともあるでしょうが、そこには彼らの自由があります。

## その二

グループホーム「ユニオンII、V」(通称アスク)は、二〇〇四年三月一日に、前号で紹介したメゾンと同じ大正区三軒家の「アスク大正」という五階建てのマンションの中に開設されました。

利用者は、男性六名(平均年齢四十歳)、女性二名(平均年齢二十七歳)。全員が障害年金を持ちます。専従の女性の世話人を置き、生活担当職員一名と嘱託職員二名が交代で宿直業務を担っています。

アスクでの暮らしは、メゾンとは少し異なります。それは、「支援者のいない時間」があることです。一〇分歩いてメゾンに行けば、二四時間三六五日、職員がそこに居ます。しかし、土曜日の夜から日曜日の午後にかけて、アスクは一般のマンション住人と彼らだけになります。

アスクに、夜の見回りはありません。朝ご飯もそれぞれの自宅で食べます。彼らには、「出来る限り自分ですること」が求められています。大変なこともあるでしょうが、そこには彼らの自由があります。

アスクに、夜の見回りはありません。朝ご飯もそれぞれの自宅で食べます。彼らには、「出来る限り自分ですること」が求められています。大変なこともあるでしょうが、そこには彼らの自由があります。

いました。しかし、その日もその次の日も、彼は家にも居ません。ふと、誰も居ない彼の部屋のゴミ箱に目をやりました。すると、まだ温もりの残る弁当袋と前日のパンの袋——ほっとして部屋をあとにしました。彼は一人で大丈夫なのです。

同じく「ワークス歩」で紹介した女性がいます。彼女は母と離れて来阪し、メゾンの事務所と壁一枚を隔てた部屋で暮らしていました。寂しさの紛れる賑やかな環境で、職員と密な関係を持ちましたが、干渉されることはうっとうしくもあつたようです。アスクへの引越しを決めました。

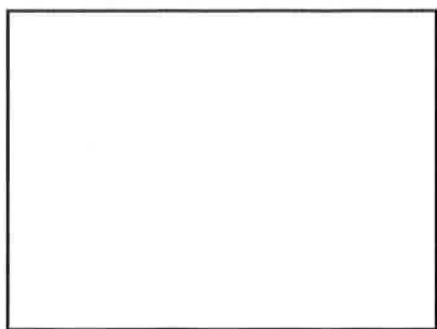
彼は言います。「急に家に来られるのは嫌なんです。僕は僕でやることいろいろありますから。」

彼は言います。「急に家に来られるのは嫌なんです。僕は僕でやることいろいろありますから。」

女が、「アスクはやっばり寂しい」と漏らしました。でも彼女は、母や職員との距離が近すぎると、うまくいかなかったってしまうのです。支援者は、彼女の屈折した寂しさを分かりたいと思います。

そんな彼らを一番近くで見守っているのは世話人のNさんです。「靴を揃えない」「今日は元気がないけどどうしたの？」職員では

そんな彼らを一番近くで見守っているのは世話人のNさんです。「靴を揃えない」「今日は元気がないけどどうしたの？」職員では



なく母でもない、「世話人」という立場で、どこまでみんなの中に踏み込んでいいのか。でも、ここで自分が

言わなければ誰が言うのか。Nさんの葛藤があります。

でも彼らは、Nさんを受け入れています。入れ替わりで夕食に来て、Nさんとの一对一の時間を楽しんでいきます。ここには、メゾンにはないゆとりと、世話人であるNさんとの関係があるのです。

夕食を済ませて自宅に戻った彼らは、自分だけの時間を過ごしします。その場で、「アスクを離れて一人暮らしをしてみたいか」と前述の彼に尋ねてみました。すると彼は、真剣な顔で首を横に振るのです。生活に必要なことは一人で出来るはずの彼なのに、なぜ離れたくないのか。

彼が求めているもの、それは「安心感」なのかもしれない。それぞれが求めているものを理解し、「できる限り自分で暮らしたい」という彼らを支えていきたいと思えます。(内田)

## ユニオンの生活支援

ユニオンのグループホームは、皆さんもご存じのように、集合型で、ユニオンI〜VIまでの6棟のグループホーム二十五名の利用者が、メゾンサンロイヤル、アスク大正の二つのマンションに分かれて生活しています。

それぞれのマンションに、宿直を配置し、二十四時間いつでも利用者のヘルプコールに応えられるようにしています。

支援者は、利用者二十五人の二十五通りの人生・个性的な生き様を尊重し、その心の中に土足で足を踏み入れないよう、「本人の苦手なこと・できないこと」のみを手助けし、その生活を支えています。

去年の春より保護者の皆 きました。

様一人ひとりと、じっくりと 中には、「障害の重い我が時間を割いて個別面談を行 子も安心して暮らせる、手厚っています。 い支援を行ってもらえるグループホームも、造ってほし

しか終わっていませんが、 ループホームも、造ってほしい。」との願いも聞こえて来「生活支援」の面での保護者 ました。

の願いは、「衣、食、住、な こだわりが強く、毎日 夕もつと介入して欲しい。」「自分 食後に必ず2時間から3時分たち二人が、元気な内は、 間、好みのパンフレットなど今の生活を続けさせたいが、 を求めて散歩し、自室に山積自分たちが動けなくなつた みのコレクションを作りごら兄弟にみてもらおうわけに 満悦なOさん。 は、・・・。」との、将来への そのOさんは、年に1回程切実な不安の声が聞こえて 度は、散歩中の不審に思われ

る行動で警察のご厄介になることもありますが、「まあしょうがないか！これがこの人の楽しみなのだから。」

一昨年の年末に、突然二人で寄り添うように暮らしていた父を亡くし、グループホームに入居したTさん。

日々の仕事と、たわいない会話に花が咲く仲間たちとのふれあいや、自分の部屋で過ごす自分だけの楽しみの時間。

この一年で、すっかりグループホームの生活にも馴染んでこれた様に見受けられます。

しかし、いつも豆電球を灯したまま朝出勤する彼の姿に、かけがえのない父を失ってしまった、この人の言い尽くせない淋しさを感じてしまいます。

再就職を果たし、生活保護を返上し、念願の一人暮らしまで再びたどり着いたSさん。

今は、「ちよっと一休み」

なのかもしれませんが、ダイエットをやめたとたんに、日に日に確実に増えていくその体重。分かっていても自分ではどうしてもコントロールしきれない食欲。

再度のダイエットに踏み切ることとはたやすいことですが、「それだけでいいのだろうか？」

彼女なりの「生活の充実感」、「これからどうしようという自分なりの目標」が見つけられていないように考えてしまいます。

ユニオンは、「保護者の皆様の想い」と、「本人の必要性」に応じて、必要なサービスを創る利用者主体の組織です。

将来的に日常生活面での介助を必要とする人が現れれば、職員体制を変更してでも、介助体制を造らなければならぬし、造る覚悟もあります。

親御さんの「我が子の、生活をもっと整えて欲しい。親の様に接して欲しい。」との思いはよく分かるのですが、

私たち支援者は、決して親御さんの代わりはできないし、するべきではないでしょう。親ではない、「支援者だからこそできる支援」を追求して行かなければなりません。

私たち支援者と利用者さんとの関係は、「大人と大人の」対等な関係として、利用者さんの「真のヘルプコール」に確実に応えられる存在になりたいと、考えています。

また、「自分の人生だ！職員・支援者に、介入されたくない。」「今はそっとしておいて欲しい。」「この利用者さんの気持ちも、大切にしたいのです。」

「自分なりの、目標や生き甲斐を見つげるための活動。」や「自分の淋しさをまぎらわせてくれる物を探す活動。」などの、本人の「潜在的な願いや想い」を具体化することに重点を置き、利用者さんの皆さん一人ひとりが、「充実した生活」を送れるように、共に考えていきたいと思えます。

(南石)

### 法人忘年会の一幕

十二月二十一日、豪華なホテルで、利用者と職員の間忘年会が行われました。授産施設やグループホームなど、すべての利用者が集う一年に一回の行事でもありません。

利用者の皆さんは、スーツ姿にネクタイを締めたり、アクセサリを付けたりして、いつもとは違うおしゃべりをしていました。そして、グループごとに前に出て、踊ったり歌ったり、ものまねや手品をしたり、それぞれの個性あふれる発表を披露しました。

「乾杯の挨拶」を任せられた彼女は、職員と一緒に書いた原稿を手に、何度も練習を重ねてきました。しかし本番、百人近い人たちの前で緊張してしまい、言葉が出てきません。会場は彼女の声を聞こうと長い沈黙に包まれました。結局は職員を支えを借りながら、ゆつくりと挨拶を終えました。

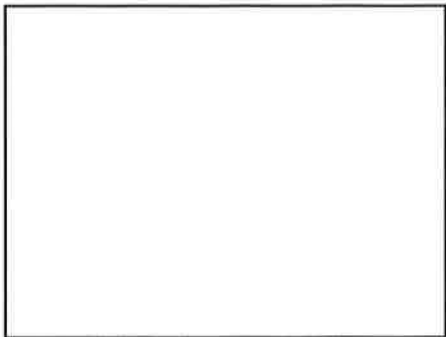
会場も胸をなでおろしました。練習の時の半分も話せなかった彼女をどのようにして励まそうか、職員は考えていました。

しかし、意外にも彼女は笑顔でこう言いました。「うまく言えてよかったです。自分と与えられた大役を果たしたことに、満足をする彼女がいました。」

どうしてこんないい顔をするのでしょうか。彼女にとっては、上手に話すことよりも、もつと大切なことがあったのだと思います。いつもみんなの中の一人ではなく、時には自分が主役になる、そんな場面を利用者の皆さんは求めているのかもしれないですね。

私たちはこのような機会を与えることができているのではないのか、忘年会を通して考えさせられました。行事においても、目の前の仕事においても、利用者一人ひとりが主役になれる場面を作っていくと改めて感じました。(宮崎)

### 職員紹介



#### 岩本強

七人兄弟の下から二番目として育った彼は、名前の通り、がっちりとした体格で、多少のことではビクともしない落ち着きがあります。しかし、そんな見た目とは

反対に、洗濯物はきっちりたたみ、ダンスの中に色別に並べないと気が済まないというこだわりとも言える繊細さも持ち合わせています。

大学では土木工学を学び、橋や高速道路の補強設計の仕事に一度は就いたものの、福祉への興味も捨てきれず、六年前に、資格も知識もない

まま、福祉の職へと飛び込みました。とにかく、わからないことは何でも聞くことで、いろいろなることを学んできたと話します。

昨年七月から、職場を当法人に変え、現在は生活支援担当として働いています。

#### 西村志津子

独学で取得した調理師資格を持つ彼女は、二年前の立ち上げ当初から、世話人としてアスクのグループホームを支えています。

うどん屋、弁当屋、串揚げ屋など数々の店を切り盛りしながら、二人の息子を育てあげ、現在はかわいい孫までいます。

休日は、友人との旅行や飲み会など、予定がたくさん詰まっていると話す彼女、好奇心旺盛で、やりたいことは尽きないようです。家族を支えるために、犠牲にしてきた自分の時間を取り戻すかのように、今は自分の人生を楽しんでいます。(中谷)

### 編集後記

先日、職員会議で「利用者を守るには、どういふことか」という内容で議論になりました。

一人暮らしをしている利用者が、「寂しい」「甘えたい」と感じ、「手を握りたい」と職員に伝えて来た時、職員はどこまで受け入れる事ができるのでしょうか。

一般論から考えると、ヒゲの生えた男同士が、手をつないで歩いているのは異様な光景です。

しかし、「手を握るだけで寂しさを一時でも忘れるなら、深く考える必要はない。職員しか心を寄せる人がいないのでないか。」という意見も出されました。

父親ほど離れた歳の利用者の手を握ってあげる事で、本人の持つ「寂しさ」は解消していくのだろうか。この議論は夜遅くまで続きました。

介護と支援の違いの中で、「手をつなぐ前に、心をつなぐ」。そのような議論を、これからも深めていきたいと思えます。(荒木)